

---

Now **三話**

ツナ缶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Now 三話

### 【コード】

N3214Z

### 【作者名】

ツナ缶

### 【あらすじ】

Now 一話からの続き

(前書き)

これでお終いです。すでにタグでネタバレですが。なんでこんなタグがあるんだろう

明るい光のようなものが私の目に飛び込んでくる。その眩しさが私を目覚めさせようとする。嫌だと首を振っても、光は聞く耳を持たず、その光線を浴びせかける。瞼は瞳を守るシャッターにもならず、光は血を透し赤くなり届く。

赤が満ちて、私は仕方なく目を開いた。

いつもと変わらない私の部屋。一般的で、特徴もない女の子の部屋だ。壁紙を淡いピンクにしたのも、女の子らしいかもなんて曖昧な理由だ。本当は、真っ白でよかったのに。

ベットから起き上がり、もう一度部屋を見渡す。……何も変わってない。私が眠りに就いた時と何も変わってない箇所はない。

けど、何かが違うんだ。

立ち上がり、クローゼットの傍まで歩く。私の衣類が全部詰まっているクローゼットの戸棚は、少し開いていた。まるで、誰かが開けて、気づいた私が閉めに来るのを見通してるかのように。

開けたくはない、結果は目に見えている。昨日だってそうだった。開けるべきじゃない。私は、絶対に後悔する。

私が知らない私がしたことを、私は、絶対に後悔する。それでも、私以外の誰かがこれを見たらと思うと、開けざる負えない。見たくもないし触れたくもないし関わりたくもないけど。例えば私の意志は一片たりともなくても、私は、私のしたことに責任を持たなければならぬのか。

昔、まだ子供の頃、山の奥深くで遭難したことを思い出す。両親とのピクニックにはしゃいで、どんどん先へ進んでいった私は足を踏み外し、斜面を滑り落ちた。長くて、傾きも急で、気づけば体中が痛かった。昼間のはずなのに、木の葉が太陽の光を隠して辺りは

真っ暗で。両親の助けを待っていればいいのに、怖くなった私は痛みを引かずして闇雲に歩いた。暗くて、静かで。私以外に誰もいなくて。それがあまりにも怖くて。

……きつと、その時なのだろう。私じゃない私が生まれたのは。日も沈んで本格的な暗闇となった森の中を歩いているうち、私以外の、別の存在を感じるようになった。気づけば近くにいて、まるでホラーだけど。その時の私は、逆に安心したんだ。守られている気がした。病院の先生は夢遊病だなんて言うけど、本当は、きつと……。

それなのに今は、私を守ってくれていない。それどころか、こうして。

生まれてきたのなら、その意味を果たしてよ……！  
意を決し、戸棚を開く。

「ああ……」

何か私が、悪いことをしただろうか。もししたのなら謝る。全力で、何もかもに謝罪しよう。

だから誰か、私を助けてください。

私のお気に入りのスカートに包まれて隠されるように、鮮やかな赤色に染まった鋸があった。

・日曜日 昼

「ようミケ。おはようさん」

目を覚ますと、そこには無精髭があった。

これだけだといったい何が起きたのかよく判断できないだろう。

でも正確に描写するのはひどく辛い。神経を使うというより、単純に精神面でのダメージを負いかねない。いや、すでに負っている。

けど目の前の現実を受け入れてそれ以上の傷を増やすことはない

考えたくなる。もう十分じゃないか。ほら覚めるよ夢そして僕。こんな空間は夢か幻か何かでしかあってはならないだろうほら早く起きろって目覚めろってなあ僕そしてこんな現実は認めないし認めようがないからああもうとにかく早くなんとかして神様————！！  
「朝から汗がダラダラ出てるぞ。大丈夫かミケ」  
「てめえのせいだからさっさと僕の布団から出るこの不法侵入者————！！」

\*

「正直訴えたら勝てるんじゃないかなって思います」

「その場合、俺はいつたいどんな罪状になるんだ」

「強姦罪」

「なんでだよ！　せめて住居不法侵入罪とかだろ！？」

どちらにせよ勝てる気がしてならない。さていくらふんどくつてやるうかなんて捕らぬ狸の皮算用を頭の中で思考し出したところでストップをかけておく。

「で、今日はいつたい全体何のご用でお越しになったのでございましょうか」

「すごい日本語になってるぞ」

「それでも意味は通じるんだから日本語ってすごいよね」

「おまえの日本語賛美はまた今度聞かよ。今日は別件だ」

おじさんの目つきが無駄に鋭くなる。仕事とプライベートを分けるのはこの目つきの変わり具合なのだろうか。どうでもいい、なんて思うのは人情にかけているだろうか。あと常識とか。

「おまえ、本当に何か隠してないか？」

詰問しているようで、その実これはただの確認だ。おじさんは、僕が今回の事件に関して何かを知っていて、それでいてその事実を隠していると確信している。

「前にも言ったと思うけど、何も」

「……なあ。俺はおまえを疑っているわけじゃない。もちろん、別の側面ではこれ以上ないってぐらい疑っているが。少なくともおまえが犯人だと疑っているわけじゃないんだ」

この人の真剣な声色を聞くのはいつ以来だろうか。両親が死んで、孤独に生きていた僕を、ただ両親が昔の知り合いだからなんて理由一つで僕を引き取ることを告げてきた時だろうか。

感謝はしてる。これ以上ないほど。けど、この問題は別なんだ。どっちが大切かなんて考え事態が愚考の極みだ。そもその単位が違う。一センチと一秒、どっちが長い？ なんて聞くようなものだ。今は、僕だけの気持ちで動いているんじゃない。

だから、僕は僕の意志で黙秘を貫く。

「俺はおまえが犯人だなんて死んでも思えない。おまえは結那ちゃんとなんと本当に幸せそうだった。普段は出来損ないの笑顔しかできないくせに、彼女の前ではちゃんと、まともな笑顔でいたじゃないか」  
……それはそれで、心中がとつても複雑になる情報をどうもありがとう。

「だから、隠していることがあるなら話せ。俺が絶対に結那ちゃんを殺した犯人を見つけてやる。そして裁かれるべき罰で、しっかりと裁いてやる」

危うく、言葉を発しそうになった。次いで、笑いがこみ上げそうになった。いやいや、ここで笑いでもしたら僕は史上最低の主人公だよ。元から最低だし、主人公の器でもないけどね。それでも、人が人を想う、尊い気持ちを笑うことはしてはならない。

それだけは、僕に残された最後の矜持だ。

「それじゃあ、一つだけ隠してたことがあるんだ」

本当は十も二十もあるけど。大半は、今回の事件には直接関係ないから。

「おお、なんでもいい。話してくれ」

「僕の後輩の女の子が結那を殺したって自供しにきた」

「……おまえは俺をおちよくってるのか」

おじさんの持った湯飲みが「あ、いやちょっと待ってくださいよその圧力自分にはしんどい……！」という言外の気持ちで出来たミシリという音を立てる。壊したら、弁償してくれるだろうか。100円シヨップで買ったんだけど。その事実を言わなければグレードが上がって返ってくるかも。いやあ、我ながら狡くて器が小さい。

「本当のことだよ。怒ると思ったから言いたくなかったんだ」

「ああ、もし嘘だったら切れてるところだ」

「何度も言うけど嘘じゃない。女の子が一人、僕に自供をしてきた」

「それで、どうしたんだ」

「何言ってるんだって一蹴した。だってありえないでしょ、そんなこと」

「まあ、そうだろうな」

それなのに、彼女は勘違いをした。どこをどうしてそんな化学反応みたいな勘違いが生まれたのかは知らない。察しはつくけど。どちらにせよ、それが彼女の人生を狂わせていることには変わりはない。

それを、僕のせいだなんて思うのはおこがましいけど。少しぐらいは、責任を感じるべきだとは思うから。

「……ほんとうに、それだけか？」

だからこそ、僕の目の前にいる常識外れのフリをする常識人には、任せられないんだ。

「それだけだよ。大丈夫。復讐なんて考えてないし、やる気概も気力もない。安心して、僕はこのまま、情性の塊のままだよ」

そうやって生きるのも、前までは一つの手だったんだけどね。

今じゃそうはいかないんだ。面倒だし、身勝手だけど。

生きる意志がない者が生きていけるほど、この世界は優しくないし、厳しくもない。

「……わかった」

納得していないことがありありとわかる表情のまま、おじさんは立ち上がった。



「何かあつたらすぐ連絡しろ。いいか、すぐにだぞ。用件なんてなくてもいいから、連絡しろよ」

「いやいや、どっちさ」

「いいから連絡しろって言ってるんだ。そうすりゃ、こつ何度も顔を出さずに済むんだからさ」

そう言つて、おじさんは僕の家から出ていく。元々は赤の他人である僕に対して、最低限以上の、申し訳なくなるほどの気遣いを見せながら。

「……だから、言えないんだっての」

僕がやるうとしていたことは、その気遣いや優しさを粉々にして突き返すようなものなんだから。

時計を見る。時刻は昼近く。決行にはまだ早いから、思い出を振り返るには十分なほど時間がある。

明日からは学校も始まる。全ては、今日中に終わらせる。そして、その後は……まあ、成り行きに任せよう。

さて、まずはどこに行こうか。思い出を辿るのだから、初めて結那と会つた場所にも行こう。

……学校つて、日曜でも入れるのかな。

\*

結那の第一印象を一言で言わせてもらつと、二足歩行の小動物だろうか。一言じゃないけど。僕の少ない語彙力ではうまく彼女を形容出来ない。

体が小さくて、生きるのに精一杯な少女。顔立ちは整つた美人なんだけど、スタイルがあまりよろしくないせいか妬みも少なく、性格も特筆するような箇所もない、平々凡々な女の子だった。

彼女を初めて、正確には本当の彼女を初めて見たのは放課後の教室のことだった。誰もいない無人の教室だと思つて入り込んだのに、彼女は一人、机に頬杖をついていた。

夕日が差し込み一面オレンジ色になった教室の中、一人黄昏ている彼女は、普段の小動物らしさの欠片もない、一人の女性のように見えた。けど、それさえも錯覚だ。

笑顔はなく、覇気もない。生きていくという印象が限りなく希薄な、最低限の生氣さえも感じないほどに、彼女は生きていくことを僕に悟らせなかった。もし、その時の彼女を死体安置所など、とにかく他に何らかの死体が転がるような場所に置いておけば、誰一人彼女は生きていくことに気づけないんじゃないかと、そんな馬鹿げた思考さえ出来てしまうほどに、彼女は『薄かった』。その時、寒気と歡喜が一片に僕を突き抜けた。この子なら、僕の望みを叶えられるんじゃないかと。そして、僕なら、この子の望みを叶えられるんじゃないかと。実際、その考えは正しかったわけだ。

日曜の学校は人気がない。校内で活動する部活動も今日はないらしい。帰宅部である僕は休日の学校というものはひどく新鮮だった。日中でありながら校舎は静かで、人の気配がない。普段は人に溢れている場所でも、時間さえ変わればここまでの空虚感を味わえる。まあ、味わえたから何？ と思えなくもないが。

僕と結那は互いに、生きることに不器用だった。息をすることにさえ特別な作法があるように錯覚して、精神的な窒息をいつでも感じているような、本来ならば誰一人感じる必要もない閉塞感を身に刻み噛み締めて生きてきた。僕は彼女よりも、顕著に感じてきたと自負はある。実際は彼女も、僕とはまた種類の違う苦しみがあったのだろう。あの家族を見ていればおのずとわかる。けど別に、大ききや多きなんて関係ない。その事実さえあれば、それは、ある目的に満身できるだけの理由になりえた。

試しに、机を一つ持ち上げ、カ一杯投げてみた。耳を劈くようなうるさい金属音と、汚く濁った衝突音をあげながら、投げた机は他の机と椅子にぶつかり、最後には床へと落ちて、音を立てる。誰もいない教室にはその残響が木霊するけど、何一つ、僕が立てる以外の音は聞こえてこない。本当に校舎の中は無人のようだ。別に、そ

れを確かめたくて投げたわけじゃない。

僕みたいな人間でも、頑張つて一石投げれば今みたいな雑音は奏でられる。波紋は起こせる。けれど、それにいったい誰が気づいてくれるのだろうか。今みたいに誰も気づかず、反響は次第に鳴りを潜め、残るのは、無様に転がる机と椅子。そして、無様に立ち尽くす僕だけだ。

ああ、なんて、意味がない。

今この僕に、この世界に生きる意味なんてあるのだろうか。

「……どっかに落ちてないのかな」

探して、探して、探して。

ようやく見つけたけど。気づいたら無くしてたんだよ。

ならいったい、どうすればいいんだ。また、探せとでも？ もう、二度目なんだぞ。二度あることは三度ある？ そして、三度目の正直を信じると？ 何を根拠に？ こんな、ただの諺でしかない言葉を信じてもう一度探せって？

もしそれで次も駄目だったら、誰が責任をとってくれるんだよ。

何時間、僕はそうしていたのだろうか。気づけば日は落ち始めていた。オレンジ色の夕日が、同じくオレンジ色の光を放ち、教室を染め上げる。

その光景は正しく、彼女がいた光景と一致して。

「……そろそろ、終わらせようか」

最後の踏ん切りを、僕につかせた。

携帯電話を取り出し、ある番号を打ち込む。登録しておくその後々面倒なことになりそうなので、頭の中に記憶してある。三回の着信音の後、声が聞こえた。

『もしもし……』

「もしもし、こんにちは。いや、そろそろこんばんは、かな。とにかくどうも」

声は、震えてない。大丈夫。傷つく心なんて持ち合わせていないし、痛みを感じることも、苦しいと思うようなことも、僕には許さ

れていない。

やることは、いつだって一つきりだ。不器用な僕たちは、一つのことばに専念しなきゃうまく生きていけない。他の人は片手間で出来るような簡単な作業でさえ、僕たちは両手を使わないと出来ないように。煩わしくても、情けなくとも。両の目を皿のように、ただ一つの事柄に専念する。そうしなきゃ、何も成せない。

そういう生き方しか、できないんだ。

「最後のお願ひがあるんだ。今日の夜、君はずっとそこにおいて」

『え、あの、そこって……？』

「いいんだ。君はわからなくていい。そもそも君に言ってるんじゃないんだ」

いつだって僕は君のことなんて見ていない。心底どうでもいい。もし君と明日の朝食で食べるつもりだったロールパン、どちらか一つを選ぶ。なんて言われたら即決でロールパンを選択できてしまうほど、君に対して関心がない。どうしてロールパンが選択肢に挙がったのかなんて、それも君に負けないぐらいどうでもいいこと。

そもそも、最初から君のことなんてどうでもよかつたんだ。だって君は僕よりも、生きている意味がない。

「いい？ 今日はずっとそこにおいてよ、雫」

僕の目的と、君の目的が叶う場所に。

「そこで、君を殺すから」

だから、何も知らずにそこで待っている。

・日曜日 夕方

よくもまあ、偉そうに言ってくれたものだと感じする。同時に、何ていらなくとも言ってくれたんだと寒心もしたが。私じゃない時の記憶はとても薄いけど残っている。ということは、逆もありう

ることをわかつているのだろうか。まあ、今のところその心配は杞憂だけだ。

いつのまにか意識の主導権は私に渡っていた。そんなにショッキングな言葉だったのだろうか。相変わらずメンタルが弱い。生まれた意味を少しも果たしてないじゃないか。だから切り捨てたくなる。物理的に出来るのならば、どれだけ楽な話だったか。詮無きことだと思考を切り捨て、やめる。ああ、だからこんな風に出ればなあ……。

悩んでいたってしょうがない。せつかくの好機だ。私が自由な間に、お膳立ては済ませておかないと。ここまで舞台を揃えてくれた彼に申し訳が立たない。そして、結那先輩にも。彼には、口が裂けても礼を言うつもりはないけど。

自分の身の内から出た錆が、煩わしい。生まれた原因は何だっただろうか、と今更ながら思い馳せてみる。辛い、と思うような出来事はいくつもあった。昔、山奥で遭難した。何日もさ迷い歩いて、身も心も限界一步手前のところでようやく保護されたことがある。自分以外の存在がたまらなく欲しくて、自分の身の内に別の何かを生み出したのかもしれない。けれど最早、それも理由の一つではない。両親が知っていることも、知らないことも。けれど今の私にはその数々の辛い出来事が、身の内に別の人格を生み出して自己を防衛せざる負えないほどのものだったとは思えない。いや、だからこそ、か。辛いとか悲しいとか、そういうものを押し付けた故に生まれたのだから。だから、今の私は正常で、あの娘が異常。

あるいは、その逆か……それとも両方、か。  
「さて」

一言口に出して宣言し、少しは心を奮い立たせてみる。気概は少しも湧かないけど。

冷めた心のまま行すべきなのか、感情を震わせて行すべきなのか。どっちの方がより人道的なんだろう。どっちを選択しようとも、結果は変わらないのに。立ち上がり、身支度を整える。部屋を出ると

両親が居間でテレビを見ていた。二人そろって、バラエティー番組を見て笑っている。

「お、どうした？」

お父さんが笑顔のまま、私に尋ねてくる。

「ちよつと、人殺しに」なんて言えたら気楽だけど、例え本当に言えたとしても絶対口にはしないんだろうな。両親から見たら、私はどこにでもいる平凡な女子高生だから。普通に笑って、悲しんで、恋をして、大人に夢を見て。ずいぶん偏見に満ちた女子高生像だけど、そこまで間違ってもいないだろう。

私も、そういう生き方がしてみたかった。

……なんて、思ってるわけないじゃない。バカらしい。

「ちよつとね、友達に会ってくる」

「遅くならないようにね」

お母さんの心配そうな声色に一瞬寒気を感じてしまう。お母さんは悪くない。何も。お父さんだって悪くない。無知は悪だなんて言うけど、それが仕方ないことだってあるじゃないか。責めるのは、お門違いだ。そんな権利は私にはない。あつたところで、するべきではない。

「うん、いつてきます」

そう簡単に告げて、私は玄関に向かう。両親たちはテレビの前から動かない。玄関の鍵を閉める時は出て行く人間が自分であることが我が家のルールだ。だからこそ、両親は私が後ろに隠し持っている物にさえ気づかない。

包み隠さず、全てを話せていたら、結果は変わっていただろうか。隠れて通院なんてしていなければ、もっと、親身になってくれたのだろうか。そうしたら、今はもうすこし……。

……ああ、なるほど。これが今更、か。確かにこれは、心が痛い。でもだからこそ、重症に葉ならないのかもしれない。多用したくなるのも無理はない。それこそ彼は、私以上に用いたくもなるだろう。きつと、今も。

唇の両端をほんのり上げただけの、お世辞にも笑顔と言えない表情を浮かべて、呟いているのだろう。そうやって、過去を諦めて生きてきたのだろう。

「さよなら」

扉を開ける前に、一言別れを告げてみる。保険と、ほんの少しのからかいの意味を込めたんだけど。居間からはテレビの音声と、両親の笑い声が響いてくるだけ。意味なんて、なかった。別に、悲しくともなんともないけど。少し、心がざわついた。

「ありがとう」

もう一度、今度は何も期待せずに、ただ単純に本来の意味で使わせてもらう。それぐらいは言おう。ここまで育ててもらった礼はするべきだと思ったから。まあたぶん、死にはしないとと思うけど。人生、何が起るかわからない。言っておいて損はないはず。

例え、私自信に欠陥があろうとも、私が関わってきた人に全て責任があることはありえないのだから。だから最後の最後まで、私は壊れていようと他人の役に立とう。それが私の命を賭けようと、行うだけの理由はある。

……問題は、いつどのタイミングで意識を明け渡すかだけど。まあ、なんとかなるか。

死にたくはないから、やるしかないんだよ。

だからごめんね、渡来雫？

私は私のために、あなたを殺すわ。

・日曜日 夜

最初はなんだったろうか。小動物、確かネズミを踏み潰した時だったと思う。いや、もっと遡ればそれこそ踏み潰してバラバラにしまったアリやセミにさえ、胸の高鳴りを覚えたのかもしれない。幼少期故の理由のない高揚感に紛れて、すでにその頃から嗜虐趣味

には目覚めていたとしても何ら不思議ではない。いつから壊れた、というより初めから壊れていたと考える方が僕にとつては自然で、反論のしようがない。元より僕は、普通ではなかったのだ。

自覚したのは前述の通り、ネズミを踏み潰した時だ。予め言っておくが、わざとではない。あれは不幸な事故だったんだ。……なーんて、今更自己弁護して何になるのか。無意味無意味。確かにわざとではないが、心が震えた。家の手伝いをしていると靴底に小気味の良い感触（個人の感想です）と、無理に形容しようとするところ「ギヤツ」って感じの甲高い断末魔がした。今思い返すと、小さいながらも存在していた骨がバキバキと小気味よく折れていく音もしていた気がする。僕の全体重がしつかり乗った靴底を全身で受け止めた初体験の彼女（メスの方が気分的にいい。僕がオスだし）は潰され原型を失った内臓や血液、そして肉を周囲に満遍なく撒き散らし、死に絶えていた。あれは爽快だった。グロテスクだとも気持ち悪いとも思わなかった。むしろ、これ以上なく美しく思えた。僕はとにかく、ぐちゃぐちゃに原型を無くした物体に、これ異常なく興奮したんだ。

ああうん、変態だということは百も承知だ。別に言われなくてもわかってる。わざわざ声高に糾弾することでもないです。自覚して異常というのは、ある意味正常なんだよ。理解できないだろうけどね。別に、理解してもらおうとも思わないしね。同好の士なんて欲しくもない。これは一人用の遊びなんだから。誰かとの喜びを分かち合おうなんて毛ほども思わないし、僕と同じような人間がいるんだと思うだけで寒気がするよ。僕は自分で自分を気持ち悪いとは思わないけど、目の前に自分がいたら「うわっ、キモっ！」なんてリアクションをとるだろうね。僕とは別に存在しているとしたら話は別なんだ。

とにかく、それからというもの僕は物体を壊すことに快感を覚える自分を知った。生きがいを見つけて喜んだと同時に、恐怖も感じたよ。だって絶対に世間からは理解されないじゃないか。常習した



ら間違いなく社会から省かれる。社会か、欲望か。秤にかけることに躊躇を覚えていたのも今では良い思い出だ。あ、もちろん今ではすっかり社会からの爪弾き者です。露見したら、の話だけだね。

さつきは壊すことが一番良い、なんて言っていたけど。最近解体することのほうが良いってことに気づいたんだ。壊す過程が一瞬では終わらないし、処理も後々楽だ。自己意識や自分の立場ってやつがハッキリしてくると、行動にも影響が出てくるものなんだよ。そうやって人は自分にとっての最善の生き方を模索していくんだろうねえ。僕の場合、「善く」はないけど。

解体はいいよ。特に、人を解体することはたまらない。動物もいくつか解体してきたけど、物足りないんだ。それに草食動物ばかりだから、血がサラサラと透明感がある。それじゃあ駄目なんだ。もっと濁った赤色でないと。あ、もちろん解体したいのは女の子だよ。同性を解体する作業に恍惚を覚えているほど男として壊れてはいないんだ。人としてはこれ以上ないほど壊れてるけど。

罪の意識ねえ……正直、ないね。悪いことだったことはわかってるんだよ。これでもこの年までこの社会で生きてきたからね。何が善くて、何が悪いか判断する常識は兼ね備えているよ。けど僕は止められないし、止めるつもりもない。常識と被害者の心情とか、そう一切のもの秤の上に乗せて、もう片方には僕のやりたいことを乗せる。そうすると一瞬でカックンと秤は傾くんだ。もちろん、僕のやりたいことの方に。

価値観の相違ってやつなんだ。殺人や、それに伴う罰よりも、自分の欲望の方が価値が上になる。だから殺人は起こる。別に欲望だけの話じゃない。自分以外の他の誰かのためとか、自分のためとか、お金のためとか。そんな理由で人は人を殺す。それは他の誰かの命より、自分の内に生まれた価値の方が重要だからだ。だから殺せる悪いことだとか関係なく、『そっちの方が大切』だから。誰もがそうやって、自分の内に秤を持っている。僕だけじゃない。自分の価値観で骨子が作られた秤を誰もが内に持ち合わせている。まあ僕の

秤は、人より幾分か特殊で壊れ気味なんだろうけど。

時期も悪かったと思う。いや、僕にとってはとてつもなくそしてこれ以上なく良いんだけど。世間一般から見てもね。両親が揃って旅行に出かけて、自宅には僕一人。これはやるしかないだろうと。むしろやらなければダメだろうと思いい、初めて僕は殺人を行なった。

最っ高だった。罪の意識なんて欠片もない。頭の中には快感の波がウネウネと波打っただけだった。麻薬を使うとこんな感じなのだろうかと、思わず別の犯罪にまで手を染めそうになるほどに、僕は狂気を覚え、狂喜した。

それからというものの、あの快感が頭から離れない。機会があつたら何度でもこなしたい。でもそれはダメなんだと、良心ではなくもつと単純な自己防衛意識が歯止めをかけた。娯楽は安全を保障されるから成り立つものだ。絶対に事故を起こすジェットコースターなんて娯楽として世に認められるわけがないように、僕の行動にも安全性が求められる。けど明日には両親が帰ってくる。そうなる下次に出来るのはいつだ？ 一年、いや二年。少なくとも自立するまではそんな機会は訪れないだろう。そんな長い期間、僕は我慢出来るのだろうか。あの快感を、感動を、何年もの間。無理だ、無理無理。そんな我慢出来るようなほど自意識の強い人間だったらそもそも殺人なんてしないよ。だけど、我慢はしなければならぬ。

そう絶望していた矢先のことだったんだ。

「……………おいおい」

よくカモがネギを背負ってやってきたなんて言うけれど。ほんと、うまい表現だなと勝手に過去の人間に対して評価を下す。獲物が、自分を食べやすく準備をして自らやって来てくれるだなんて。これはいったいなんだろう、両親がいない自由な日でありながら、たった一人を解体するだけで我慢してきた僕へのご褒美だろうか。思わず涎が口角から漏れ出しそうになる。いやいや、食べるわけじゃないんだからさ。

……………まあ、食べるけどね。比喩的な意味で。

愛用の解体道具を獲物に気付かれないように、そつと手元に忍ばせる。よくよく考えれば、僕のこの異常性は遺伝だったのかもなあ。両親の仕事を間近で見続けてきたから、どうしても命に対して考えが薄く、安くなってしまうたのかも。けど、それだと世の中は犯罪者だらけだ。それも解体殺人の。救いようがなさすぎるだろ、そんな社会。僕にとっては極楽浄土だけどさ。

一度深く息を吸い、吐く。緊張はしてない。高揚はしてるし、興奮もしてる。けれどこれっぽっちも、緊張なんてしてない。ただど気持ちの高ぶりのせいで呼吸は否応なく荒くなるし、手足はブルブルと震えて扱い辛いことこの上ない。大丈夫、やれる。つうかやれよ。またとない絶好の機会だぞ。虫や動物で満足出来ないだろ？ なら、チャンスは今しかないんだ。これで出来なかつたら、男じゃない。全国の男さんに謝るべき？ これ。

……どうでもいいか。

「……よし」

相変わらず寒い部屋だ。当たり前だけど。そうじゃないとぶら下がっているもの全部が腐って売り物にならない。暇な時はそれを切りつけて遊ぶんだけど、もうすでに分けられたものをこれ以上分けて意味なんてない。あくまで暇つぶしであって、メインディッシュが目の前にあるのに他の有象無象に目を向けるのはメインディッシュに失礼だ。

一切の音を出さずに近づく。獲物は動かない。その事実を好都合と見るか畏と勘繰るか。まあどちらにしろ、僕がやることは変わらないし、変えるつもりもないんだ。一足で間合いに入る距離まで近づく。

「え？」

突然、獲物が顔を上げる。まさか、気づかれたのか。血の気が一瞬引きかけるが、さつきも言った通りやることは変わらないんだ。このまま、振り下ろす。

「きゃあああぁー!」

切っ先は髪を一房ほど切り分けるだけという非常に物足りない仕事をこなした。もちろん満足には程遠いので、もう一足踏み込んで今度は袈裟に振り上げる。切れ味だけはお墨付きだ。ただ如何せん、重いのが難点だろうか。

「っ！」

惜しい。切っ先が服を裂き、肉体に届きはした。けどそんな脇腹の薄皮一枚程度で今更僕の興奮が治まるとでも思ってるのか。足りない。どうせその位置ならば大腸ぐらい引きずり出させる。この程度で満足できるか。不完全燃焼の感情を燻らせたまま更に腕を振り上げ切り裂こうとする、が。

「いやあああ！！」

「うおっ」

まさか反撃してくるとは思わなかった。ギザギザに連なる両刃の薄い金属が僕の鼻先を掠めた。慌てて距離を取り回避する。内に湧き出る高揚感に体を付きあわせていたら今頃僕の五感の一つは無くなっていただろう。嗅覚ってけっこう大事なんだけどね。切り分けるときの何ともいえない匂いって一度嗅いだら忘れられないよ。あ、基本的に僕の嗜好は理解されないってことを忘れていた。

もちろん、すぐさま肉切り包丁を振り下ろして鋸を破壊する。ホームセンターで安く売られているようなもので、こっちの商売道具を張り合えるわけないだろうが、まったく。刃と柄を繋ぐ部分を叩ききった鋸は、もう素手で掴むことは出来ない。自分の皮膚を引き換えにすれば、可能だろうけど。そこまで根性があるようには見えないからなあ、この子。

「危ないな。そんなもので切られたら怪我するよ」

「だ、誰なんですかあなた！　ここ、どこ！？」

「前者の質問は答える気はないよ。そんな素直に答えるわけないじゃないか。それと後者は……なんで僕に聞くの？　というか君こそ、どうしてここにいるのさ」

鋸を持って人の家に入り込むなんて、危ない人だな。我ながら、

自分のことを棚に上げるところか、すでに華麗に捨て去っているかのような考えだ。いやでも、危険人物であることには変わりないよね。僕よりは劣るけど。

「わかんない、わかんないよ！ どうして私こんな所にいるのよ……。もう、やだいい加減にしてよっ、私がいったい何をしたって言うのよお！ 痛い、血が、血が出て……」

どうしてかわからないけど急に頭を抱えて苦しみ出す獲物、じゃなかった女の子。僕だって不思議だとは思っけど、僥倖だと勝手に決め付けてるからどうでもいい。今重要なのは君の自由をどうやって奪うか、その後どうやって楽しもうかってことぐらいだし。

「ああ静かにしてね。もう夜遅いしさ。まあ迷惑かけるような家も近くはないけど」

田舎だから家と家の感覚が広いんだよね。音も声も届きにくい。だからこそ、僕みたいな人間が過ごしやすんだけど。いやあ、田舎万歳。僕のような人間が生まれ育ってごめんなさいね。

「……え？」

急に彼女が泣き叫ぶのをやめた。自分の切れた脇腹から流れる血を指になじませて、動きを止める。

「え、嘘、なんで。これが、血？」

自分の血に濡れた指先を見て、彼女は呆けたように呟く。

「血って、こんなにドロドロしてるの？」

何を、当たり前なことを言っているのだろうか。人の血は草食動物と違って、脂っこいものじゃないか。粘性があって、透明度の薄い鮮やかな紅。だからこそたまらないのに。

「ああ、ギヤーギヤー騒がれるタイプはこないだ堪能したから、今回は勘弁してね。悔しそうに唇を噛んでるだけでいいよ。ああそれと、君が何の理由を持ってここに居るのは知らないけど、そんなこと僕には関係ないから」

誰もが何らかの理由を持って生きているのは理解できるけど、そんなこと、一々気にかけていたら殺人なんて出来ないよ。僕は僕の、

誰かさんは誰かさん自身の希望を叶える。優劣も一切気にせず、ただ目的に向かって慢心しないと願いなんで叶えられるはずがないじゃないか。僕のは行き過ぎだってことはわかってるけど、そうでもしないと叶えられないし。

何を呆けているのか知らないけど、とにかく好都合だ。

「だからまあ、ごめんね」

一応、おざなりに謝罪を加えておく。意味なんてないし、悪いと思ってるぐらいなら最初からやらない方がいいんだけど。

「い、いや、いや、いやあ」

正気と自身の置かれている状況が回帰したのか、涙で顔をぐちゃぐちゃにして泣き叫ぶ。やめてよ、そんな顔。僕にとっては逆効果なんだから。

「だってさ、やらないと僕の人生が楽しくないんだよ」

僕の薄汚れてさび付いた人生に、彩を加えないといけない。生きがいの一つしかないんだから、僕にそれをやるなと言うことは「死ぬ」と言うのと変わらないんだよ。もちろん僕は死にたくはないわけだし、仕方ないよね。

さてさて、まずはこの手にした刃物を死なない程度の量で真っ赤に染めよう。

「いやいや、それはちょっと勝手な理屈過ぎやしないか？」

無粋で、どこか芝居がかった声が聞こえた。

\*

「あー、焦った。走ってるうちに傷口が開いちゃってさ。止血やら何やらで手間取った、ごめんね」

本当だったらもう少し早く来て優雅に君たちのイチャつきっぷりを観察してるはずだったんだけど。まあ、タイミングは良かったよ

うだし、結果オーライかな。

「いやーしかし。随分勝手なことを口走ってたね。人生が楽しくない？ バカじゃないのか。楽しい人生なんてあるとも思ってたのかよ。生きるとは苦しくて、辛くて、泣きたくて。どこまでも理不尽で不条理なのに。君は僕と同じだけ生きてるくせにそんなことにも気づいてないのか。人生経験足りてないんじゃないか？ 君、渡来さんとどっこいどっこいの思い込みだな。この勘違いさんめ」  
少し考えればわかることだろう。考えなくても、生きていれば嫌でも思い知る。

「その内思い知るだろうけどさ。いやまあ、今この場で思い知らさせるのも有りっちゃ有りだけど。今回はやることが多いからまたの機会にしてもらってもいいか？ 遠野くん」

屠殺場、っていうんだっけ、ここ。よくわからないけど牛の胴体の形をした肉の塊が並んでぶら下がっている。いやあ、グロイね。よくもまあこの二人はこんな気分の悪い場所でイチヤイチャできるよ。血の匂いと牛特有の獣臭さ、後は……人の血の匂いも混じっているのかな、これは。

だとしたら、心底気分が悪い。

「さすがに人殺しした後悠然と登校出来るほど壊れてなかったのかな。やーいこの中途半端。ズル休みはダメだよ。壊れるならしっかり壊れてろよ」

壊れるなら壊れる。割れるなら割れる。無くなるなら無くなる。

中途半端はよろしくない。

まあけど、割れそうで割れない、輝だらけの花瓶やガラスも。それはそれで人間らしくて嫌いじゃない。もう十分に壊れているくせに、それを必死で隠して、装って。けれど、傍から見たらバレバレで。その姿はあまりにも滑稽で、無様で。あまりにも、僕たちにそっくりだ。

個人的な感想だけだね。

「せっかく周りの気遣いの視線とか、物珍しげな視線とか、そうい

う煩わしいものを持ち越えて学校に行ったのに。まあ、普通に登校していたらその場で警察に叩き出してたかもしれないけど」

「……どうして、おまえがいるんだよ」

「いちゃ悪い？」

「悪いに決まってるだろ。僕はこれからお楽しみタイムなんだよ。邪魔するのなら、おまえも殺すぞ」

「出来るものなら。なーんて買言葉返してみたくもあるけど、別に邪魔をするつもりは更々ないよ。どうぞご自由に堪能ください。当方お勧めの商品です」

僕の言葉に、二人して呆気を取られている。その二人の顔を見て思わず噴出しそうになるのを下唇を噛むことで堪える。まだまだ、笑うのは全部が終わってからだ。

「おいおい、渡来さんは驚かないですよ。さっき電話で言ったでしょ？」

そこ、つまりこの場所で君を殺すと。

「ミ、ミケさんが殺してくれるんじゃないんですか？」

まるでその、僕に殺されるなら良かった、なんて口ぶりはやめて欲しい。僕にそんな権利はないし、するつもりもない。君の罪を、最後の最後に僕に押し付けるような真似はやめてくれ。

「そんなわけないじゃないか。僕は平凡に生きたいんだ。人殺しなんてした時点で、平凡からはかけ離れる。僕はごめんだよ」

すでに大分かけ離れているからこそ、少しは軌道修正を図りたいんだ。元には戻れないにせよ、ね。

「というわけで、思わせぶりに登場はしてみたけど僕は一切関わることではないから。どうぞどうぞ好きにやっちゃってー」

両方の手のひらを遠野に向けて雑に犯罪を勧めてみる。そんな僕の行動に、遠野は不信任を隠さない視線を送ってくる。いやまあ、当たり前だろうけど。

「何考えてんだ、おまえ」

「どうだっていいだろ。いいからちやちやとやってくれよ」



「だって、見られてたら恥ずかしいだろ」

「そんな乙女な反応は一切期待してなかったよ。いや、ほんと、マジで」

どこに殺人に羞恥心を持ち出す殺人鬼がいるんだか。

「ん……ああ、なるほど。順序が違うのか」

なんだ、勝手に勘違いしていたよ。これじゃあ渡来さんのことを笑えない。

最初から、笑う権利なんてないけど。

「うーん、それは困るなあ」

出来るなら五体満足で返してあげたいし、何も外傷も残したくない。まいった、途端に難易度が上がってしまったみたいだ。ええい、タイトルからやり直させる。それかセーブ機能を実装してくれ。これだから人生はクソゲーなんて評価が下されているんだ。全部無理だってことはわかってるけどさ。

「出来ればさ、殺してからやってくれない？」

「はあ？ 無理に決まってるだろ何言ってるんだ。そんな変態じゃねえよ」

どっちもどっちだよ。結局両方とも、世間からは認められない。もしそのタイプの変態さんがいたら、そっくりそのまま同じことを言われかねないって。

「仕方ない。それじゃああまり時間をかけずに済ませてくれ」

「ふざけるな。どうしておまえに指図されなきゃいけないんだよ」

その言い返しをしていいのなら、僕も同じことを君に言いたい。

「ねえ、渡来さん」

ならば方向性を変えよう。計画の基本的な骨子は変えられない。出来る範囲で頑張ってみよう。

たとえそれが、必ず一人を不幸にしようとも。

その不幸が、誰かを幸福にすることを知っているから。数少ない選択肢から一つだけを、選ぶしかない。どっちか、しか。

ほら、やっぱり人生は理不尽で、不条理だ。

「君は、自分は何も悪くないなんて言い方をいつもするけど、それは違うよ」

確かにそれは真実ではあるけど、全てが全て、君以外のせいでもない。

「君自身が気づけばよかつたんだよ。気づいて、考えて、一緒に解決策を見つければよかつたんだ」

けれど君は、自分のことしか見ていなかったから。自分のことしか、頭になかったから。まるで、自分だけが苦しんでるなんて、そんな身勝手な勘違いをしていたから。

君以上に。いや、君のせいで苦しんでいる人がいることに気づきもしなかつたから。

だからこうして、僕に殺される。

「残念だったね。そういう意味では、全部君のせいだ。だから君の望みどおり」

言い終わる前に走り出し、落ちていた鋸の刃を掴む。ギザギザの鮫の歯みたいな薄い金属が手のひらに突き刺さる。それでも、しっかりと握り締める。遠野が僕がやるうとしてしていることを察して止めようとしてくるけど、それよりも早く渡来さんの元まで走り寄り、刃を首元に当て、宣言。

「僕が、君を殺すよ」

「……あは」

渡来さんは、笑った。

「……笑うなよ」

僕も苦笑を浮かべて、刃を引いた。

ドサリと、渡来さんの体が倒れる。少しも動かさず、止まったまま。

「……おいおい、おまえ何やってくれちゃってんだよ」

「何言ってるんだ、見てわかるだろ」

崩れ落ちた渡来さんと、刃に滴る赤色の液体。

倒れる渡来さんの体を一瞥した後、遠野に視線を戻す。

「人を、殺したんだよ」

「……いや、おまえこそ、何言ってるんだよ」  
「ほんとよね」

遠野の僕を小馬鹿にしたように上げた唇の端が、彼女の声で戻る。  
「馬鹿みたい。結局あなたがやって。今までの苦労はいつたいなん  
だったんですか」

「仕方ないだろ。この遠野さんが違うベクトルの変態だったのが悪  
い」

「さっきまで偉そうに語っていたくせに、人のせいにするんですか  
？」

「……そうだね、僕が悪い」

全て元を正せば僕のせいだ。背負う必要も義理もないものを勝手に  
背負ったのも、僕だ。今更認めても、遅いし、意味なんてないけ  
ど。

「痛くないですか、それ」

雫が僕の手のひらから未だボタボタと垂れ続ける液体を指差した。  
「痛いよ。まあけど、これぐらいは、ね」

ジンジンと傷口が熱を持っているのがわかる。一つ一つの刃が深  
く手のひらの肉に食い込んでいる。痛くてしょうがないし、脂汗も  
額から沸き出てきた。それでも、出来損ないの拳は解かない。

「人を、殺したんだし」

厳密には殺人ではないけど。それでも、負うべき傷と痛みがある。  
「……ほどほどにしてくださいね」

呆れたように息を吐いてから、雫はどこからかハンカチを取り出  
し、僕の空いている方の手に握らせた。処置も全部、自分でやれっ  
てことだ。よくわかってらっしゃる。

「おまえら……なんなんだよ」

「どうも初めまして変態さん。私が本当の渡来雫です。以後、よろ  
しくお願いしません」

お嬢様のように、ありもしないスカートの端を掴むようにしてお  
辞儀をする。うわぁー、似合わねえ。口にしたら未だ刃を掴んだ僕

の拳をギュツと上から握り締めるという特殊な握手を交わすことになりそうだから言わないけど、言えないけど。

「さっきまでの私は忘れてください。史上最悪の黒歴史なので」

「……はっ、なんだ。揃いも揃って異常者ばかりかよ」

「筆頭が何を偉そうに」

雫がそう吐き捨てるように口にする。僕もそう思っていた。たとえ意志が疎通していても何ら嬉しくともなんともない。誰もがそう考えるだろう。

「……一応聞いとく。なんで、僕が新井山さんを殺したってわかったんだ？」

「そんなの、逃げる君を見かけたからだよ」

息を荒げて公園から走り去る君を。

「別に推理なんて一つもしてないよ。謎解き要素も一つもない。現状証拠だけで十分だった」

僕は探偵でも警察でもない、ただの高校生なんだから。どこその名探偵のように脳内で理屈をこねくり回して真実を見つけただすことなんて出来やしない。目に見えたもので判断するだけだ。

「本当はすぐさま君の所へ駆けつけてやろうかな、なんて考えてもいたんだけど。僕は僕で犯人だと疑われているし、そんな僕が急に君に接近したら、君が犯人だってバレてしまうし」

だからといって更々逃がす気はなかった。だから雫に遠野の見張りを頼み、その代わりとして、ひどく歪曲した殺人を頼まれたわけだけだ。割が合っていたかどうかは、まだ判断は早いかな。

「で、遠野はこれからどうするんだ。僕たちを殺すか、このまま逃げ出すか。僕としては後者を強くお勧めするけど」

「おまえ、今の状況をわかって言ってるのか？」

遠野が手に持った銀色の輝きを掲げる。肉切り包丁って、あんな物々しい形をしているんだな。当たり前か。文字通り、肉を切るために存在しているのだから。肉に対して、これ以上ないほどの凶器だろう。そして、僕たちは丸腰。二人がかりで立ち向かって、そ

こいらにぶら下がってる牛のごとく綺麗に解体されるのがオチかも  
しれない。

「一応、わかってるつもりだよ。異常な殺人鬼の前に自ら進んで来  
たんだ。ある程度の覚悟はしてる」

「へえ、そいつはご丁寧にどうも。けど男はお断りしているので早  
々にどつかで適当にくたばつといってくれませんかね」

「僕の自主性を信じるお人よしは君で二人目だよ。僕が素直に自殺  
なんてするわけないってのに」

「だよなあ、まいったな。男を解体するのは趣味じゃないんだけど  
「趣味の括りに入れていいものじゃないだろうに、それ」

「結那さんも、それで殺したんですか？」

級友との久々の語らいに突然乱入してくる雫。そういうのはもっ  
と、時間かけてじっくり問いただす方が雰囲気出ると思うんだけど  
なあ。

「うーん、どうなんだろうな。そりゃ確かにこれで動けなくなるぐ  
らいには切り裂いたけど。それが直接の原因じゃないと思うよ。あ  
あでも、出血多量で死んだんだだろうし、それならこれで殺したって  
ことでもいいか。うん、これこれ。これで新井山さんを殺したよ」  
刃のない部分を手のひらで叩く。笑顔で、自身がした行いを白状  
する。

全く正しくない行いを、正しいことをした子供のように。

ほら、僕今ゴキブリを踏んづけて殺したよ、みたいな。

命を奪ったことを、誇らしげに。

「ずっと好きだった、なーんてプラトニックな感情はないよ。昔う  
ちの牧場で牛の乳絞り大会っていうのをやってさ。新井山さんがそ  
れに参加してたんだよ。あの頃から、僕は彼女を壊したくてたまら  
なかった。いつも切って遊んでいる牛の乳房に彼女の小さな手が触  
れてるんだ。幼いながら興奮した。わかる？ この感覚？」

『わかるかこのド変態』

本日二度目のシンク口口撃も、この変態には効き目がない。

「あれは奇跡みたいだったなあ。両親が旅行でいないから、これは絶好のチャンスだと思って街中ブラブラしてたんだよ。そしたら公園の隅っこで新井山さんが一人でいてさ。もうこれはやるしかないだろうと、その場で全部済ませちゃったよ。本当はここに持ち帰ってじっくり時間をかけて楽しみたかったんだけど。そっぴや、おまえが最初に見つけたんだっけ。どうだった？ ゴミ袋に詰められた彼女を見た瞬間ってさ」

「別に、どうも。ただ、よくこんなに出したな。なんて感心したくらい」

袋を開けた瞬間に鼻に飛び込んできた血の匂いと、栗の花のような、腐ったイカのような、異臭。

「バラしてる間が一番興奮するんだよ。だからバラしながら、ヤツちまうわけだ。我ながら器用な真似をしているという自負を持っている。たぶんこの界限じゃ一番うまいんじゃないかな」

「……そりゃ、そうだろうよ」

世界選手権なんてものももしあったら、おまえが優勝するだろうさ。出場者一名により繰り上げ優勝、みたいな感じに。

「防臭剤で隠しきれてなかったけどな。というかどうしてあんなに防臭剤とか防臭剤とか、そんなの持ち歩いてるんだよ」

「常識だろ、そんなの。いつでもこの包丁とゴミ袋とその他一式は持ち歩いてないと、いざ好機！って時に何も出来ないじゃないか」

「当然のように言うな顔を傾けるな。それはおまえの世界の常識だよ」

どこまでも局所的な、誰にも認められない単一の世界の。

遠野が一つ、ため息を吐く。

「正直なところ、おまえには申し訳ないなって思ってるんだよ。彼女殺しちゃったし、しかも処女まで奪っちゃったし。というか今まで手を出してなかったことに驚いて、一瞬素に戻っちゃったくらいだ。もう手足は切り分け終わってたからどうしようもないなってことでそのまま続けたけどさ」

それなら、君の嗜好の順序が違ったら、結那は生きていたかもしれないってことか。

……いや、だからなんだと。今更今更。

「実は、僕たちは付き合ってたんだよ」

「あ、そうなの？ なら気遣いはしなくてもよかったのか」

「……切り替え早すぎない？」

「いいんだよ、あんまり時間ないし。明日には両親が帰ってくるし、いい加減、我慢できないし」

包丁の切っ先が僕らに向けられる。ほんと大きい包丁だなあ。肘から指の先ぐらいまでありそうだ。まあ、僕の腕を基準にして、だけど。雫や遠野の腕だと、少し長さが足りないかな。結磨さんぐらいでちょうど良いかもしれない。

「用があるのは渡来さん、だっけ？ そっちだけだから。今なら逃げておかまわないぜ。というか、面倒だからさっさとどっか行け」

「僕を逃がして、そのまま暮らしていけると思う？」

「もうそんなこともどうでもよくなってきちゃった。今がよければ、それでいいや」

狂人になるとは、こういうことだろうか。瞳は濁ってて、息は荒くて、口元はだらしく開きっぱなし。自分の欲望にしか目が向かなくて、他者の希望なんて眼中にさえなくて。

……ああ、後半だけは、誰もがそうか。誰もがどこか、狂ってるのか。

極論かもしれないけど、あながち間違っていないよな。

「私を、結那先輩と同じようにするつもりですか？」

「いや、まったく同じじゃつまらないだろ。今度はもっと時間をかけて楽しもうと思ってる。出血で死んだら困るから、傷口は凍らせしておくか。幸いここはそういう施設だ。死なないようにして、じつくりたっぷり楽しむよ」

「お断りします」

その拒絶を、歯茎が見えるほど全力な笑顔で拒絶して、遠野が駆

けてくる。包丁の切っ先は僕ではなく、雫に向けて。

その殺意と肉欲が混じった瞳を、きつと彼女にも向けたんだろう？

「なあ、いい加減にしようよ」

僕だつて壊れていて、まともな人間とは言えないけどさ。

誰かが目の前で殺されようとしていて、何も出来ないほどに、狂つてなんかいないから。

「何もかも自分の思い通りになると思うなよ。全部が全部期待通りになるわけじゃないか」

今の今まで、ゴツゴツとお腹に当たつて痛かった。無骨なデザインで、用途なんて一つしかない物を取り出す。

「自分の生きがいなら、誰にも迷惑にならない無難なものを探せよ。おまえみたいに人様に迷惑をかける生きがいは淘汰されてお終いだ」  
手のひらによく馴染むように設計された造形。人差し指は小さな輪に入れ、細く湾曲した部分にかける。

「それにさ、小学校でも幼稚園でも、小さい頃に教わらなかったか？ 自分がされて嫌なことは、人にもするなつてさ」

安全装置を外し、先を遠野に向ける。他に向けるべき相手なんていない。

肉に対しての凶器が、遠野の持つ肉切り包丁ならば。

僕の持つこれは、人に対する凶器。

人が人を殺すため、傷つけるために生まれた、何よりもわかりやすい殺意の具現。

駆けていた遠野の動きが止まる。振り上げていた包丁の切っ先を下ろし、ギギギと機械的な動きで僕に振り向き、絶句する。

「……おまえ、なんでそんなの持つてるんだよ。本物、か？」

「父親の遺品なんだ。これしか残ってないつても考えものだけど。今こうして便利に使わせてもらってるし、感謝しとかないとね」

銃の名前なんてわからないけど、たぶん向こうでは珍しくともなうともない型なんだろう。よく映画や漫画で見るような、わかりや



すい形状。ハンドガンって、型名じゃあないよねえ……。

よくもまあ、これまでおじさんに見つからなかったと思うよ。本気で家捜しでもされたらすぐに見つかるだろうし。家におじさんがいる度に心臓が跳ねた。

「僕が持つと、それなりに『らしい』と思わない？」

「ミケ、おまえ、そんなの俺に向けるなよ」

愛称を呼ばれて鳥肌が立つ。思わず引き金に置いた指を動かさしうになつた。

「君にそう呼ばれるのは不愉快だ。特別に本名を呼ばせる権利を与えようではないか。喜べ」

「喜ぶ要素がねえよ。マイク・エバンス」

そう、それが僕の名前だ。体は必要もないくせに無駄に大きく、日本人とはかけ離れた外見。髪を染めるだなんて発想にさえ至ることもないほど田舎の中、黒色とは文字通り異色の金髪。望んでもいない青色の瞳。そんな僕に、ミケだなんて猫みたいな可愛げのある呼び名は似合わない。ローマ字読みなんて、愛称を決める手段としては常套だけど。

「昔さ、なんかどこかの頭がお花畑の人が急に僕の家にお邪魔してきてね、マシンガンを乱射したんだ。お父さんは立ち向かって、お母さんは僕をかばって」

そうして、二人とも死んだ。片方は僕から危険を取り除くために立ち向かい、片方は僕を守るために。僕のために、二人とも死んだ。何も悪いことなんてしていない。ただ生きていただけだ。理由なんて、脳内に花が咲いた人間の勝手な理屈。犯罪に巻き込まれる理由なんて、大半がそんなものだ。

これまで生きてきた中でこの行いが善であろうか悪であろうかが、そんなことは全く関係がなく。偶然や運命だなんて、不確かなもので割り込んでくる。

「守られたんだ。命を賭して、僕を。こんな僕を」

だから生きていないといけない。救われた命だからこそ、懸命に

生きていけないといけない。けど、両親を失った世界は、苦しくて遠縁を辿ってこの島国に来て、頑張って生きてきたけど。

どうしても、生きることに意味が見出せなかった。

だって、どんなに真面目に生きても、正しく生きたとしても。いっどこで無残に死んでしまいかもしれないという可能性があるこの世界で、どんな希望を持って生きるというんだ。

真面目に正しく生きても、死ぬ時は死ぬのに。

「別にさ、今君に殺されなくても、僕たちっていつかは死ぬんだよね。どんなタイミングでも、どんなに志半ばでも、死ぬときは死ぬんだ」

なら生きていることに何の意味があるのだろう。死ぬことに何の意味があるのだろう。わからないから、頑張って探そうとした。見つけようとした。

そうして、ようやく見つけたと思ったのに。

「だから、どうせ死ぬなら意味が欲しいんだ。今君に殺されることに何らかの意味があるのなら、喜んでその刃に身を沈めよう。けどまあ、今は生きる意味ってのが一応あるからさ。結局断るけど」

即席の出来損ないの理由だ。別に僕でなくてもいい。そもそも僕がやるべきことではない。他に行くべき誰かがいることはわかってる。

けど、同じ約束を二回も破ることは、してはいけないと思うから。

「さあどうしようか。これが偽物だと信じて突進するか。本物だと信じて逃げ出すか。どっちを選んでくれてもかまわないんだけどね」

このまま時間が過ぎていくのが僕にとって好都合。目的はもう果たしたし。けどだからといって、このままだと僕の右手から全ての血液が旅立ちそうさ。まだ一人旅だなんて心配だけど、たくさんの赤血球たちがお供してくれてるから大丈夫かな。……なんだこの気持ち悪い思考は。血が現在進行形で失っていくせいか。というか、遅いなあの人。いつまで待たせるんだ。

「君にはお世話になった。これで雫の邪魔者を綺麗に消し去れたか

もしれないし。というか雫、君の用事はもう済んだんだし、帰って  
もいいんだよ？」

銃という明確な武器を味方にしたため、今まで僕の後ろに隠れて  
いた雫も今では僕の横に並び、一緒に遠野を見ている。ここで急に  
銃口を向けたらどうという反応するだろう。興味が心の内にほんのり  
湧き出たが、やめておく。なんだか冷静に顔を叩かれそうさ。それ  
に自ら硬直状態を壊してどうする。死にたいのか僕は。さっきまだ  
死ねないなんて言ったばかりなのに。

「馬鹿言わないでください、こんな機会そうそうあるものじゃない  
んだから。しっかり見ておかないと」

「さいですか」

田舎だからねえ、刺激があるような事件はそうそう起きないもん  
だ。実に結構だと思うけどさ。

人が少なかりうと、閑散としていようと。そこに笑いながら普通  
に暮らせている人がいるのだから。それだけでいいのに。

どうして、どこにでもおかしな人っているのかなあ。

「……ああ、糞。何でこうなったんだ」

遠野が乱暴に髪を掻きながら、今更そう口にする。何でなんて、  
そんなの、考えるまでもないのに。

「君が殺したのが結那でなければ、こうはならなかったよ」

もしそうならば、この事件は僕にとって何ら関係のない事件へと  
成り果てる。どこかの誰かがどこかで死んだ。ただそれだけの事件  
に。

……結果は、変わらなかつたかもしれないけどさ。

「僕は君が羨ましくてしょうがない。本当なら君と立場を交換した  
いぐらいだよ。本当、本当にさ」

僕は別に遠野が憎いわけじゃない。なんてことをしてくれたんだ  
という恨みと、嫉みがあるぐらいだ。つまり、嫉妬してる。

結那を殺せた、こいつに。

「……僕が、結那を殺したかったのにさ」

外から聞こえてくるパトカーのサイレンの音のせいで、二人に聞こえたかどうかはわからないけど。

とりあえずこの銃が見つかったら、説教どころじゃ済まないよね……。

・もうずっと、遠い金曜日

始めから、結末は変わらなかった。理想と現実の違いは、誰が結那を殺したか、ということだけ。

「何か用？」

夕方の教室に一人佇む彼女は、普段の愛想なんて欠片もない、冷たい表情と声色で僕に尋ねた。

「用は、別にないけど」

「なら、話しかけないで。視界にも入らないで」

吐き捨てるように僕を拒絶し、視線はまた窓へと向けられる。窓の外にはオレンジ色に輝く夕日と、それに照らされるグラウンド。広がる山々。僕の位置からでは姿は見えないけど、熱心な生徒が部活動に精を出しているだろう。疲れを感じさせるも、元気の良い掛け声がここまで響いてくる。

僕は何もせず、立ったまま彼女の姿を見ていた。深いオレンジ色に彩られた髪を、少し開いた窓から流れ込んだ風が揺らす。机に頬付いて景色を眺め続ける彼女の姿を、僕はずっと見続けた。

美しい光景だと思った。同時に、悲しい光景だとも思った。

「……なんなの」

不機嫌さを一切隠そうともしない表情で、僕を睨みながら言う。けれど怖くも何ともない。恐怖感なんて、当の昔に麻痺して無くしてしまった。眼光鋭く睨む視線を、僕は真正面から見つめ返す。

「どうしてそんな不機嫌なのさ」

「得体の知れない外人と放課後の教室で二人きりだから」

「得体の知れないって、同じクラスじゃないか」

シチュエーションだけなら、確かに嫌な部類に入るかもしれない。知ってるわよマイクくん。何が好きで何が嫌いで、どんな趣味を持ってるかも」

「おお、それは恐悦至極。まさかこんなところに僕に想いを寄せる娘がいるなんて」

「けどそれ、全部嘘なんですよ？」

作り笑いが、一瞬剥がれそうになってしまった。鼓動の速度を上げようとする心臓に小さな怒りが芽生える。腹の底に力を込め、何とか動揺は欠片も出さないよう試みる。

「そんなことないよ」

否定の言葉もどこか安っぽく、拙い。ただ否定するだけで、何の根拠も裏打ちもない。

「あなた、いつもどこか遠くから私たちを見てる気がする。心が離れてるとか、そういうものじゃなくて、最初っから私たちと自分を分けている。別の存在だとも思っているような。近づこうとせず、遠ざけようともしてないけど、境界線を明確に作ってる。なんだか、針の先が潰れたハリネズミみたい」

二の句が告げないほど、事実を言い当てられた。だって、僕は外人で。中身は君たちと同じ日本人だけど、外見だけは変えようもない。それだけじゃなくて、心も、壊れて、日々が乾燥していて、少しも楽しくなくて。

生きていることが、苦痛なんだから。

「……他の人たちと自分を分けて、何が悪い」

「悪いなんて言っていないじゃない」

僕の本心を引き出せたことが嬉しかったのか、彼女はそう言うてようやく笑った。いつもの活気に満ちた笑顔じゃなくて、唇の一端を上げるだけのニヒルな笑顔だけ。

「日本に来て、何年？」

「そつだねえ。もう三年になるかな」

「へえ。その割にはずいぶん日本語うまいね」

「それはまあ、相当勉強しましたから」

異端であることは割り切れた。日本人同士にだって、見た目の違いはあるけれど、僕みたいに根本から違う人はいない。特にこんな人の少ない田舎町ではそれが顕著に現れる。それが変えられないのなら、意思の疎通ぐらいはできないといけない。

言葉は、自分の意思を伝える上で必要不可欠だから。伝えたとしても、その後の仲違いや齟齬は起きてしまうけど。まあ、大前提と  
いうことで。

「ねえ、もう一つ質問いい？ 痛いつて思いながら死ぬのと、悲し  
いつて思いながら死ぬのつて、どっちが苦しいのかな？」

「いいよ、と返事する前に質問が開始される。」

「さあ、どっちだろうね」

どちらの場合もなったことがないからわからない。大抵の物事は  
経験しないと理解なんて出来ないのに、僕の身の丈以上の答えを要  
求されても困る。

「別に、どっちも変わらないのかも」

それでもまあ、せつかく聞かれているのだから、僕なりの答えつ  
てやつを返してみる。

「変わらない？」

「うん。だつてさ、死ぬ時は大抵痛いし、悲しいものじゃないか」

何十年も生きて末の大往生ならともかく。人が死ぬ時はほとんど  
が不慮であり、不確定だ。意識さえもせずに死んでしまうようなこ  
ともあるけれど、それ以外は自分の目の前に現れた『死』というも  
のを凝視して死んでいく。それはきつと、痛みを伴い、悲しみを生  
み出すだろう。どこからともなく。限りがなく。

「あはは、そつか。そつだねえ。どっちか一つなんて、ありえない  
んだよね」

僕の返答がお気に召したのか、ようやく彼女は声をあげて笑った。

どうやら言葉選びは成功したらしい。日本語というのは語彙が多すぎて使いこなすのが難しい。何年過ごそうが、僕の口は意味だけをどうにか通わした薄っぺらい言葉しか紡げない。それでも、目の前に彼女は笑ってくれるのだから、まだまだ僕の日本語も捨てたもんじゃないのかもしれない。

「私さ、お兄ちゃんに襲われたんだ」

自身に少なからずの自信をつけた僕に対して、唐突な事実を口にする。言葉の暴力とはよく言ったものだ。意識が一瞬別の空間へと旅立ちそうになってしまった。そんな僕に一切配慮もなく、彼女は言葉を吐き続ける。

「私のお兄ちゃんって頭良くてさ、大学でも何年に一度の逸材とか言われてすごいチャホヤされてたの。体も大きくて、格闘技なんてやって文武両道。そんなもんだから家でも両親がチャホヤして、好きなように生きて」

言葉の内容は、どこか皮肉めいているのに、口にする彼女の表情は誇らしげに見えた。肉親の良さを自慢するような、そんな、世間の妹らしい表情。

「でさ、ある時お兄ちゃんが急に私のベットに入ってきたの。そして体を触ってくるの。胸とかお尻とか、そういうところ。嫌だつて抵抗してもお構いなしでさ。好き勝手に。別にお兄ちゃんのことを嫌いだったわけじゃないんだよ。けど兄妹でそんなことするのおかしいし、初めては好きな人と、なんて夢も持ってたからさ、大声上げて助けを呼んだの。そしたらさ、お兄ちゃん壊れちゃった。問題になって、天才天才なんてもてはやされてたのに、一瞬で壊れちゃった」

上がっていなかった唇のもう一端が段々と曲がっていく。口元だけが笑顔で、目は笑っていない。キラキラと、鈍い光を放っている。

その光景は不気味でありながら、どこか、悲しかった。

「お父さんもお母さんも、口ではしょうがないなんて言ってるけど本心では私を憎んでるんだよ。だって出来の良い息子を失って、残

つたのは中途半端な娘一人だもん。そりゃそうだよ。普通は良い方を選ぶよね当然だよ。じゃあさ、私は黙ってお兄ちゃんにレイプされていればよかったの？ それで丸く収まつてたの？ 私一人が犠牲になつてれば、ずっと幸せな家族のままだったのかなあ。私一人が不幸になれば、それでよかったのかなあ……わかんないよ。どうすればよかったの？ もうやだ、死にたい。死にたいよ。苦しいよ、もう嫌だよ……」

嫌だよと、何度も呟いて彼女は俯く。嗚咽は聞こえなくとも、瞳は涙に滲んでいるのだろう。家族想いの、どこにでもいる普通の女の子なのに、どこにでもない不幸を携えて、今ここにいます。

僕たちはふと、忘れてしまいそうになる。自分だけが不幸じゃないってことを。自分以外の誰もが、何らかの不幸や痛みを持って生きていることを。理屈では理解できている、自分が不幸になればそれがこの世で一番の不幸なのだと錯覚する。僕の悩みも不幸も苦しみも、目の前で今にも泣き出しそうな声のまま、笑顔を浮かべる彼女を取り巻く環境も。世界にはこれ以上の不幸がゴロゴロ転がっているんだろう。

けど僕たちには、目の前のことしか世界として認識できないから。遠くのどこかで存在する不幸にさえ意識を配れないほど、どこまでも自分本位な生き物だから。

「ねえ、新井山さん」

目の前のものだけを大切に生きて、いいじゃないか。

「君を、殺してあげようか？」

「え？」

泣いている女の子が目の前にいるから、なんとかしてあげたいだなんて。そんな、安っぽい感情を持って。

「君が望むなら、僕が殺してあげるよ。今すぐじゃなくていい。じっくり考えてくれてかまわない。君が死にたくなったら、君を殺してあげる」

そういう生き方があったって、いいじゃないか。



「それまでに、君が生きる意味を考えよう」

今にして思えば、随分不恰好な告白だったと思う。

君を終わらせるのは僕であって欲しいという、どこか歪んだプロポーズ。

「いつでもいいよ。いつまでも待ってる」

それが正しくなくても、間違っていたとしても。

僕に出来ることなんて、これぐらいしかないと思ったから。

「もし、生きる意味が見つからなかったら。その時は、僕に君を殺させてください」

そうして、頭を上げて手を差し出した。

もし、こうして誰かを大切に想うことが「愛」であり、「恋」だとしたら。

「……うん」

一筋零れた涙を拭おうともせず、彼女がその手を掴んだその時。

僕たちは、確かに恋人同士になった。

例え、互いに互いを終わらせる間柄であろうとも。

確かに僕たちは、恋人同士だった。

互いに愛を語らずに、騙る。不完全で、歪な。

それでも

・月曜日

まさか通常授業なわけがない、と高をくくっていたのが悪かったのか。昨日おじさんにたんまり説教を受けた僕は悠々と大遅刻をした。凶悪殺人犯が捕まったというのに、学校はいつもと変わらない。たぶんいつの日か、全校集会とかで知らされるようなことになるのかもしれない。

屋上から見下ろすグラウンドには、たくさんの生徒が思い思いの

昼休みを堪能していた。サッカーをする人。木陰で雑談をする人。とにかく走り回る人。全体人口の少ないこの村の学校であろうと、少ないながらも生徒は存在する。そんな元気な彼らを、僕は屋上から呆けて見ていた。

何も、変わらない。先週屋上に上がった時見下ろした風景との差異を探そうとして、時間帯が違うことと空に浮かぶ雲の形ぐらいしか思い浮かばない。前は授業中、今は昼休みか。一つの事件が解決を迎えたとしても、こうして広い目で見れば大した変化は見えない。世間とか社会とか世界とかなんて、そんなものだ。

僕も雫も、よく説教だけで済んだとは思う。隠した銃も何とかバシらずに済んだし、当初の目的も運良く完遂出来た。特に失敗らしい失敗もない。晴れてこの町で起きた凶悪殺人事件はこれにて幕を閉じたことになる。

でも、幕が閉じようとも、一度演壇で起こった事実は変わらない。遠野が人を殺したことも。雫の中にいる渡来さんをこの手で殺したことも。結那が僕以外の手によって殺されたことも。全部、変わることなくその事実は永遠と存在し続ける。

「こんなところにいたんですか」

屋上の扉が開き、雫が姿を見せる。この学校の指定制服に身を包んだ本来の渡来雫を見るのは随分久しぶりな気もする。

「やつほ。どう調子の方は。切られた脇腹は平気？」

「清々しい気分、とは言いがたいです。人を一人、消してるし。脇腹もまだ痛みます。けど、あなたよりはマシかと」

「そっか」

数々のお説教と共にいただいた拳骨は僕の頭頂部を陥没させるには至らなかつたけど、逆に膨らませるぐらいは容易だったのだろう。頬に貰った一発も、一晩で腫れが引くほど優しくもない。でもまあ、これも覚悟の上だ。もっとひどくても良かったぐらいなのに。中途半端に優しいんだ、僕の家族は。

「統合、出来ればよかったのにね」

解離性同一性障害。通称、多重人格。元の人格を守るために、別の人格を生み出し肩代わりさせる。ちょっと乱暴な説明だけど、大方そういう病気だ。

自身を防衛してくれるありがたい存在。けれどその人格が防衛ではなく、自衛に向けて生きだしたら。それはもう、厄介な別存在ではない。

僕が殺した渡来雫は、自分が正しい渡来雫だと思いこんでいた。そして別の、本来の渡来雫を邪魔な存在だと、異質のものだと決め付けていた。そんな勘違い娘に対して、自身を元の一つの存在だと認識させ、最初の渡来雫に戻すだなんて「統合」が出来るわけがない。

ならば、他にどうすればいいのか。それはもう、一つしかないじゃないか。

「……あなたには辛いことを押し付けたと思っています。私一人で全て請け負うべきことなのに」

罪のない女の子に恨まれ、罪のない女の子を陥れる痛み。

そして、確かに存在していたはずの一人の人間を殺した、重み。

「いいよ。元々受けようとしていたものだ」

その機会を、たまたま果たせなかっただけで。きっと今は変わらない。

この胸の沈殿物は、変わらない。

「それに交換条件だったわけだし、気にしないでよ。むしろそっちこそご苦労様。僕の代わりに遠野の見張りは面倒だったでしょ」

「それこそついでです。大量の動物の血なんてそう簡単に用意できませんし。ペンキで作った血なんて、いつ見破られてもおかしくなかったですから」

「……そうだといいねえ」

思い込みから生まれた彼女は、思い込みで生きていた。自分の方がまとも。おかしいのは寝ている間の私。けれど私にはどうしようもないから、どうか私を殺して下さい。

……今考えるととんでもない帰結をしている。血塗れの包丁が部屋にあつて、その前の晩に知り合いが惨殺された。だから私が犯人だ。筋が通っているようで、通っていない。けれど彼女はそれだけで、自分が殺されるに値する人間だと錯覚した。

錯覚から産まれた存在は、錯覚でしか殺せない。けれど、錯覚で人を殺す事だつて、自ら死を選ぶ事だつてできる。

錯覚だなんて曖昧なものに、僕たちは振り回されて生きている。

代表例は……愛、とか？

「……私を脅していた時、楽しそうでしたよね」

「そんなことはないよ」

薄っぺらい否定をしておく。彼女の中での罪悪感を増やすための行為だつたけど、あの行為は自虐と嗜虐を兼ねていたから、つい張り切っちゃっただけで。決して僕の本性が飛び出てきたわけではないんだ。たぶん。

もしくは、自分よりも価値のない存在を見つけて嬉しくなってしまうたのかもしれない。自分よりも下を見て、安心した。

それはそれで、とても人間らしい気がする。そんな慰めをして少し、気が晴れた。

意味はない、ねえ。

「君のことは結那にも頼まれていたんだ」

「結那さんが、ですか……？」

「うん。『自分を助けた後は、あの娘のことも助けてあげて』、つて」

……きっと、同じ助けるとい言葉でも、結那と隼とでは、意味合いはまるで逆なんだろうけど。

「君がいてくれて助かったよ。結那が殺されたことを知ったあの日、君が僕の家に来なかつたらどうなっていたことか」

「別に、何もしてないじゃないですか。ただ家が上がって、部屋の片づけをしただけで」

殺された結那を見つけたあの日、僕の精神は限界を迎えかけてい

た。思い描いた未来と酷似していながら、まるで違う今に心が砕かれそうだった。僕が殺したわけでもないのに、犯人扱いされて。けれど、だからといって逃げ去った遠野のことを警察に告げれば、本当に何もかも無くなってしまいそう。ずっと沈黙を保ち、ようやく家に帰されて。気づけば、部屋は滅茶苦茶になっていた。我を忘れて暴れまわるなんて、僕も相当おかしくなってしまうなんて自嘲していたところに、雫は来てくれた。

「それだけでもよかったんだよ。君がいてくれたおかげで、やるべきことを思い出せたのだから」

そこからは話がとんとん拍子に進んだ。僕に嫌疑がかけられている内は、明らかにアリバイも何もない遠野が疑われずに済む。けれど、遠野をノーマークで放っておくことはできない。知ってしまったからには、これ以上の殺人を起こしてはならないからだ。だから雫に監視を頼んだ。代わりに、私を殺す計画を手伝って欲しいという条件を飲んで。

「血で汚れた鋸は、機会があればいつでもやっていました。ペンキで作ってみたい、父が日曜大工で怪我をした時に、慌てて包んだタオルを使ったり。けど、実際に事件が起きたわけじゃない。そうになると、あの娘は忘れてしまうんです。実際に起こった出来事と繋げないと、あの娘の中には残らなかった」

そして、起きてしまった殺人事件。新聞でもニュースでも報じられた出来事は彼女の中に色濃く残った。しかも被害者は自分の知り合い。その上、自室のクローゼットの中には作り物の血で汚れた包丁がある。

そうして出来上がってしまった偽物の殺人までの軌跡。皮肉にも大切な友人を犠牲にした図式の上で。

それでも、雫は計画を進めた。それを非人道と蔑むか、結那の死に少しでも意味を持たせてあげがとうと思うべきか。

……まあ、どっちも正解みたいなものだし。どっちでもいいか。僕みたいに、取り返しのつかない失敗を全て「今更」で片付けるよ

りは、ずっと有意義だろう。

「ねえ、唐突だけど。今更って英語で、単語一つで何て言うか知ってる？」

「今更、ですか？」

「うん、今更」

「……いえ、ちょっとわからないです」

「そっか。興味があるなら調べてみて。良く出来た皮肉だから」

英語と日本語を又にかけて生きてきた僕には、これ以上ない皮肉。今更なのに、今とはねえ。似て非なるものだろうに。意味は違えど音は同じだなんて。

どんなに思考を巡らせ、努力しても、今更から今へは至れないのに。

いつだって、今しか存在しない。過去には手が届かないし、未来は今の延長でしかない。それを同じ言葉一つで表すなんて、皮肉もいいとこだ。

落下防止用のフェンスから手を離し、屋上の床に寝転がる。目の前には何の遮蔽物もない、真っ青な空が見える。今は視界の中に入らないけど、その内風が雲を運んでくるだろう。青い空を覆う隠す白い雲。いやまあ、どうでもいいことだけどさ。

言ってしまうえば、この世界の全てはどうでもいいことだ。

そう割り切っていないと、僕の心はここまで保てなかった。

どうでもいい無意味な思考を繰り返していないと、不安にある。

自分よりも不必要なものを無理にでも引き出して。

僕よりもいらぬものがあると、身勝手に自己を昇華しないと。

僕は僕を、どこまでも見下してしまう。どこまでも、限りなく。

こんなどうでもいいことがあるのだから、僕だって存在しているいいじゃないか、と。

そうやって無理矢理、理由を作り出さないと、僕は……。

「あなたの目的は、果たせましたか？」

「うん。これ以上ないほど完璧に」

雫が寝転がる僕の傍に座る。フワリと風に乗って香った匂いは、やっぱり同性とはいえ、結那とは違う薫り。

……結那の匂いって、僕の中だと最後の血の匂いなんだよなあ。うわ、嫌なこと思い出した。

僕が頭を振って浮かんだ光景を飛ばしていると、ふいにポケットに入れていた携帯電話が震え出した。取り出し、通話ボタンを押す。「もしもし？」

用件だけを伝えてくる。誰が何をしたか、そしてどうなったか。いつもこれぐらい簡潔だと、話しやすいのにな。仕事だからってこともあるんだろうけど。

「……うん、わざわざありがと。それじゃ、仕事頑張ってるね」

いつもなら言わないような労いの言葉を口にして、通話を切った。たぶん今頃、向こうじゃ苦笑いでも浮かべているだろう。

「……誰から、ですか」

「おじさん。遠野、死んだってさ」

寝転び状態から復帰、無駄に高い視点からこの村を見下ろす。本当に特色もない、どこにでもあるような田舎村だ。畑仕事に精を出し、若者は離れていき、過疎化が騒がれるも、こうして、目に見える範囲ではたいした変化を見出せない。どこにでもある普通の村。

それでも、こんな村でもこの短い期間で二人の若者が死んだ。

そして今も、どこかで誰かが死んでいく。僕には関わりなく、たくさんの悲しみを代わりに生み出して。僕にはどうしようもなく、誰にでも、どうしようもなく。

田舎だろうが都会だろうが。人が集まって住む限り、何らかの摩擦を生み、その熱は痛みとなり、そして……。

「どう、して」

顔には出していないけど、声は震えてるよ。わざわざ告げて心象を悪くするほど馬鹿じゃないから言わないけど。今更だけどさ。

「誰が殺したかなんて、言わなくてもわかってるでしょ」

護送中の一瞬の出来事だったらしい。突然割り込んできた青年が

ナイフで一突き、喉の頸動脈を的確に突き切った。遠野は即死。青年も現行犯でその場で現行犯逮捕。

「……結磨さんは、病院でも普通じゃなかった。いつも叫んで、そばに結那さんがいないと暴れて、手に負えなかった」

「結那も大変だったろうねえ。本当は自分が通院したいほど苦しんでいたのに、したくもない兄の付き添いをしなきゃならなかったんだから」

病気の重度でいえば、そりゃまあ結磨さんがダントツでひどかっただろうけど。だからって、結那が辛くなかったわけじゃないの。どこまでもお人よしで考え足らずのあの家族は、最後まで娘の苦しみに気づかなかった。結果として、その娘を亡くした。たった一人のまともな子供を。そして、子供全てを今日、失った。

誰もが、どこか足りていない。そしてそのことに目を逸らして、気づかないフリをして生きていく。その末に失って、涙する。

それが当たり前だから誰も言わない。そして、解決する術も持たないから、提言も出来ない。誰もが心の中では気づいているくせにそんな馬鹿げたサイクルで、今日も世の中は回っている。

「あーあ、もつたいないなあ」

予想通り、結磨さんは僕の望み通りの壊れ方だった。自分本位で、そもそも自分以外に意志が存在してないかのように勘違いをしている。狂人のモデルと言っても過言ではないほど、壊れていた。

もし、結那を殺していたのが僕だったら、結磨さんは僕を殺してくれていただろう。遠野のように。一突きで、一切の迷いもなく。

自信の恨みを晴らすという、意味のある行為で。

「ほんと、もつたいない」

「……あなたは、何がしたかったんですか」

「結那を殺したかった。殺して、結磨さんに殺されたかった」

「どうして」

「意味のある死に方をしたかったんだ。意味のないことが大嫌いで、だから生きる意味もないのに生きてるのが嫌だった。けど、死ぬ



意味もなく死ぬことも嫌だった」

だから意味のある死に方を求めた。けど、この世界には意味のある死なんてそうそうない。世界を救うために自分の命を賭けるような漫画的な展開もなければ、車に轢かれそうな子供を助けるために自分が引き換えに、なんて展開も待つていられない。ならば、恨みを買って、その恨みを晴らすために殺される。それぐらいしか、自分で作り出すことは出来なかった。

けど、僕には誰かを殺す権利なんてないから。だから、死を、誰かに殺されることを望む人を探していた。自ら死を望み、そして法を犯してでもその恨みを晴らすことの出来る人間が傍にいる者を。

結那は、これ以上ないほどの逸材だった。

「あー！ほんつともつたいない！」

遠野が羨ましい。僕がどれほど苦労して探し出したと思ってるんだ。横からかつさらいやがって。殺人罪よりも前に盗難罪だ。もう死んでるからこれ以上罪状は増やせないけど。

「僕なら、最後は笑わせてあげられたのにな」

今更だ。と心の中で唱える。言い聞かせるように。染み渡らせるように。

今更というのは、後悔を消し去る言葉だ。もう覆せない事実を諦めるための。今更どうあがこうとも、結果は変わらないのだから諦めると、自分に言い聞かせるための。

風が吹く。雲が運ばれる。髪が揺れる。日の光を反射した金髪は、苛立つぐらいに輝いて見えて。

目を閉じる。風はまだ吹いている。その風が風ぐ音。そして、校庭からは楽しげな生徒の音が響く。その音の群れに、雫の音が混じる。

「……結那さんは、あなたと一緒にいるようになってから笑うようになりました。今までの、作り笑いじゃなくてちゃんとした、結那さんらしい笑顔を」

もう一度、今更と唱える。

「今が幸せだつて言っていました。自分のことを考えてくれる人がいるって。自分のために、人生を棒に振る覚悟が出来てる人がいるって、だから幸せだつて」

何度も、何度も、唱える。

「あなたがどんな答えを示そうとも、自分は生きる意味を見つけたつて言っていました。だから、そのためにあなたを呼び出して、あなたの答えを聞いって。同じだったら、嬉しいなって……」

頭の中で口の中で心の中で。何度も何度も。同じ言葉を繰り返して繰り返して繰り返して。

風の凪ぐ音も校庭から聞こえる笑い声も雫の言葉も耳に入らなくなるほどに強く何度も何度も。

「本当は、あなたも、結那さんを殺すつもりなんてなくて、一緒に生きていこうと」

昼休みの終了を告げるチャイムが鳴った。屋上に設置されたスピーカーからやかましく、劈くような音を立てて僕たちに知らせてくる。

ほら、もう時間だよ、と。

僕はその知らせに、ああ、わかってるよ。と返す。

キーンと小さい耳鳴りが鳴り止むのを待って、僕は口を開いた。

「それこそ、今更だろ？」

久々の拙い苦笑いを浮かべながら、ようやくそれだけを言えた。

雫の嗚咽が聞こえ始める。君が泣く必要なんてどこにもないのにそれでも、人は涙を流せる。誰かのために、涙を流せる。

嫌なところも多いけど、良いところだって、人間にはたくさんあるんだ。

至らなくて足りなくて、どこまでも勘違いを繰り返す馬鹿みたいな生き物でも。ここまで生を繋げたのだから。摩擦が生んだ熱が誰かの不幸を呼んでも。それでも、その熱が幸せを生むこともわかつ

ているから。

ここに、今この場に、僕たちは存在している。

これは今更じゃない。前から、知っていた。

教えてもらっていたんだよ。

なあ、結那。

「ほら、もう昼休みはお終いだ。早く教室に戻りなよ」

「……あなたは、これからどうするんですか」

「約束を果たすよ。大丈夫、今すぐ死にはしないから」

まだ瞳に涙を浮かべる彼女の頭を、そつと撫でる。僕の身長は高いから、少し手を上げれば簡単に彼女の頭頂部へと手が届く。細く糸みたいに綺麗な髪を、手のひらで、優しく撫でる。結那にも、同じことをしてあげたことがあったかもしれない。

もっと、してあげたらよかったのかな。

……ほら、いくらでも今更が溢れてくる。限りがないよ。

「じゃあね、さよなら」

「はい……ミケさん」

ボタンと音がして、ようやく僕は一人になる。そろそろ授業が始まる。グラウンドにはもう生徒は一人もいない。この時間には体育もないようだ。校舎からは屋上に響くまで大きな音もしない。風が耳元を風ぐ音だけが、耳に入る。

「……さて」

僕はポケットから髪束を取り出す。糸で括られた一房の黒髪。昨日、雫から渡された物だ。遠野の見張りのついでに、これを探すことも頼んでいた。袋に詰められた結那には、明らかに髪の毛の量が足りていないことをおじさんから聞いていたからだ。

もし一つでも何かを間違えてしまっていたら、雫は殺されてしまっていただろうか。今更考えても、意味のないことだけだ。

現に、雫は生きている。なら、それだけでいい。

逆のポケットからライターを取り出し、髪束に火を付ける。パチパチと燃える黒髪を僕は手放さない。火が回り、手のひらを焼こう

とも、限界まで持ち続ける。文字通り焼けるような痛みが手のひらを充滿する。昨日鋸を掴み出来た傷ごと火は焼いていく。肉の焦げる匂いが鼻につく。髪のを束を持つ手が震える。脂汗が額から滲む。奥歯を噛み締めながら、僕は上を見上げる。

我慢する。痛いだけなら、いくらでも我慢出来る。本当に辛いのはもっと、他にある。

髪束は燃え尽き、灰になった。予想以上に少ないそれを、手のひらに乗せたまま、風に流すように、手を上げる。

「ほら、これで全部だ」

風が吹き、灰はすぐに吹き飛ばされた。肉眼で見えないほど細かくなった彼女は風に吹かれ、どこかへ飛んでいく。

これで、全部だ。

出来れば、ずっと答えは出さないままでいたかった。君との日々は予想以上に、ずっと楽しくて。出来ることならいつまでも続けていたかった。答えを出して、終わらせることが怖かった。

「先に言えよ……」

もっと早く答え合わせをしていたら、結果は違ったのだろうか。

君を背負う覚悟が出来ていることを告げていたら、「今」は違ったのだろうか。

次があるなんて考えなければ。いつ終わるかわからないという、身に刻んだはずの常識を意識していれば。きっと、今は。

「……今更、だ」

今の僕に、生きる理由なんてない。けど、生きていけば、歩き続けていけば、目標は見えてくる。マラソンのように、ただ走り続けて苦しい時。足を動かすたびに変わる景色の中でいくつもの目標を作る。電柱、変わった色の屋根、大げさに応援する見学者。

僕を見る、同じクラスの女の子。

いくつものその場限りの目標を作りだし、それに満身する。次はあれ、次はあれ、と。

そんな風にいくつも道に並べて、一つ一つ拾っていくような、そ

んな生き方をしよう。今は意味も理由も目標もなくともいい。けど生きていけば、走り続けていけば。きつとわかりやすい目標がどこかに見えてくるから。

そんな、君との触れ合いの中で見つけた、僕の生き方。

そういう生き方だってあるんだって、君に伝えようとしていたんだよ。

「泣いたんだってな。君は、最後に泣いてたんだよな」

なら、生きたかったんだよな。生きようとしていたんだよな。だから、犯されながらも、傷つけられながらも。達観せずに、泣いたんだよな。

その、君がいつのまにか得ていた希望に気づけなかった僕の落ち度を、誰か目一杯責めてくれないかなあ。そうしたら、たぶん僕は楽になれると思うんだけど。

……どんな意味でも、ね。

「忘れないなんて、言える立場じゃないかもしれないけど。最初にした約束ぐらいは、守るよ」

これが最後の弾だ。父さんが残してくれたのはたったの二発。というより、これだけしか持ち出してこれなかった。二度と空港には行きたくないぐらいの緊張を味わうのは、それこそ二度とごめんだ。最初は結那と、僕に分だったんだよなあ。切られるより、撃たれるほうが僕にはふさわしく思える。結磨さんなら、そんな僕の心意気なんて無視して問答無用で首を掻っ切ってくれるだろうけど。

そんな考えも、何もかも、全て、今更だ。希望も、思い描いてた未来も、何もかも届かないことを心に刻み付ける。忘れないようにもう二度と、間違えないように。

……そう意識するだけで、ずっとそんな未来が続く世界でもないけど。それでも、生きていくのだから仕方ない。

残った一発を、どう使うのか。自分か、他者に使うのか。それもまあ、今は、置いておく。

とりあえず、生きよう。生きることが出来るまで。君に伝えられ

なかつた生き方で。無様で、不器用でも。君を背負うと勝手に誓った者なりに。

脇腹とズボンの間に無理矢理挟みこんでいた銃を取り出し、銃口を空に向ける。

「さよなら。約束どおり、今から君を、殺します」

彼女の全てが還った空に向けて、僕は初めて引き金を引く。

(後書き)

別に作者としてはバッドエンド至高主義であるわけでは決してなく、創作なのだから、現実では起こりえないほどのハッピーに満ちてていいじゃないか、と思ってキーボードを拙く打ってます。他の駄作もどうかと思うぐらいのハッピーに満ちてます。

けど、後悔のない人生を送るためにはどうしたらいいんだろう。そう考えた時には、どうやっても「最悪」のケースを想像するしかないですよね。その最悪を回避するために、頑張って最善へと向かえるように。

そういった、自分への警告を込めた駄作でした。それでもまあ、「今更」はたくさん生まれていくのでしょうけど。お付き合いくださり、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3214z/>

---

Now 三話

2011年12月11日03時10分発行